

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：32658

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04249

研究課題名(和文) 日欧米史料による帝国大学農科大学の総合的研究

研究課題名(英文) Research on the Imperial University, Agricultural College Based on Foreign Records & Archives

研究代表者

熊澤 恵里子 (Kumazawa, Eriko)

東京農業大学・その他部局等・教授

研究者番号：90328542

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：日欧米の史料調査により帝国大学農科大学成立史を再検討し、以下の3点を明らかにした。(1)1890年6月の帝国大学農科大学設置は山県有朋総理主導の下実施されたもので、根底には薩長の派閥対立という政治的要因があった。(2)設置により帝国大学及び6分科大学が構造的に文部省管轄下に統合されると共に、帝国大学令で規定した「国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其濫奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス」という文部省の論理を貫徹した学問的意味は大きい。(3)1885年以来の農商務省官立学校の大学化計画では農学教育の理念を作成し、学理と応用を調和し日本の風土に適した農事改良を目指し日本型高等農学教育の条件整備を行った。

研究成果の概要(英文)：I reexamined the establishment of the Imperial University, Agricultural College based on Japanese and Foreign records & Archives. The following 3 points were revealed. (1) The establishment of the Imperial University, Agricultural College of June, 1890 was led by Prime Minister Aritomo Yamagata and its root was a factional dispute between Satsuma & Choshu. (2) By the establishment of the Imperial University, Agricultural College, the Imperial University & 6 Colleges were structural integration under the Ministry of Education and also carried out the logic of the Ministry of Education prescribed by the Imperial University Order. It's logic was "The purpose of the Imperial University is to teach Academic Arts & Skills that responds to the utility of the State." (3) Since 1855, the College Plan of the Ministry of Agriculture & Commerce had started. The modern Japanese type higher agricultural education was created, harmonizing theory and practice to improve agriculture in Japan.

研究分野：教育史

キーワード：農科大学設置と薩長官僚 日本型学問観の形成 学理と応用の調和 エドワード・キンチ 大学化計画と条件整備 越境する科学 学問共同体 杉浦重剛

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究が対象とする帝国大学とは、1886年の帝国大学令による成立した唯一の帝国大学のことであり、その前身は1877年創設の東京大学である。その後、京都・東北・九州・北海道・大阪・名古屋が加わり、計7校の帝国大学が創設され、戦後は国立総合大学に変わったが、現在でも「旧帝大」と呼ばれ、大学間の絆も強い。近年、大学史研究の天野郁夫が「七帝大物語」を『学士會会報』に連載するなど、「なぜ帝国大学なのか」という基本的な問いかけとともに、帝国大学設置過程の再検討が課題となっている。帝国大学に関する研究は大学史、学部史などの制度史的研究がほとんどで、実態史的研究はまだ十分とはいえない。なかでも、帝国大学農科大学設置に関しては、当時賛否両論があったとされながらも、本格的な研究は行われておらず、「なぜ帝国大学なのか」、「なぜ帝国大学に農学を置くのか」という疑問には答えが出ていない。大学の意義が問われている現代において、改めて総合大学における各学問分野の存在意義について、原点に立ち返り再検討する必要があるのではないか。

(2) 帝国大学農科大学は、1890年6月に農商務省所管の東京農林学校が文部省所管の帝国大学に移され、6番目の分科大学として設置された。先行研究では文部省が農工商の学校管理権をすべて傘下に収めることを企図した結果であるとし、「総合大学の一文科として工学と農学が入り込んだことは、ヨーロッパの大学に比べて日本の大学の独自な性格となった」と結論づけた。農科大学設置は教育政策上、管轄省ならびにドイツモデルの大学制度の導入を決定づけたもの、あるいは斟酌の上、独自の発達を遂げたものとして位置づけられているが、周辺史料による解釈も多く、十分に解明がなされたとはいえない。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、1890年6月の帝国大学農科大学設置が総合大学に農学を取り入れたドイツの学問体系を意識的に導入したものであることに着目し、帝国大学農科大学がどのような目的をもって設置されたのか、どのような経緯で実施に至ったのかについて、日・欧・米における史料調査により明らかにすることを目的としている。

(2) 帝国大学農科大学設置に際しては、農学教育を管轄する農商務省と帝国大学を管轄する文部省の対立、各省内での異論、帝国大学評議員の反発など、様々な問題を含んでいることから、学際的アプローチによりその政治的、教育史的意義を明らかにしたい。また、ドイツモデルの農学教育がなぜ帝国大学に導入されたのかについて、従来の制度史のアプローチに留まらず、欧米の主要な総合大学における農学部設置の思想との比較検討

を行いながら、解明に取り組む。

3. 研究の方法

本研究は、国内における史料発掘と欧米における大学史資料調査の二つを柱として取り組んだ。

(1) 国内調査では、東京大学文書館、国立国会図書館、国立公文書館を中心に1次史料の閲覧・撮影・解読・分析作業を実施した。主に大学史の基本史料、政府関係者史料、新聞・雑誌、御雇外国人などである。具体的には、東京大学文書館柏分室所蔵「農学部前身組織関係資料」を1875年4月から1890年6月までの関係史料を時系列的に整理した。また、法人文書開示請求により、帝国大学の「評議会記録」を閲覧した。「帝国大学五十年史史料」「文部省往復」など、帝国大学総長渡辺洪基、加藤弘之関係文書については、本研究申請前に閲覧・収集済である。国立国会図書館憲政資料室所蔵の当該期の大臣及び農商務官僚・文部官僚の関係文書（山県有朋・井上馨・陸奥宗光・前田正名・品川弥二郎・青木周蔵・芳川顕正・松方正義・辻新次・桂太郎・三島通康・黒田清隆・浜尾新・佐藤昌介・渡辺洪基・松井直吉・森有礼・杉浦重剛・寺田勇吉・吉田清成・大木喬任など）を閲覧した。国立公文書館所蔵『公文録』『太政類典』などから駒場農学校及び東京農林学校、学校関係者（学校幹事前田献吉・教員松原新之助など）の調査を行った。

国立国会図書館・東京大学明治期新聞資料センター所蔵・早稲田大学中央図書館所蔵の新聞・雑誌記事（『日本』・『中央獣医学会雑誌』）を調査した。『時事新報』・『農業雑誌』・『大日本農会報告』・『教育時論』・『読売新聞』・『毎日新聞』・『東京日日新聞』・『朝野新報』は本研究の申請前に閲覧・収集済。外交史料館所蔵の御雇外国人関係史料。福岡県久留米市立中央図書館などで学校幹事柘植善吾関係の調査。兵庫県豊岡市で文部官僚浜尾新関係の調査。

(2) 国外調査では、英国・ドイツ・米国での調査を実施した。英国では、総合大学における農業教育及び農学部設置についてケンブリッジ大学図書館、オックスフォード大学図書館、レディング大学博物館で、駒場農学校キンチについてヘーゼルメア図書館・文書館及びキューガーデン文書館で、獣医学教育関連史料についてエジンバラ大学図書館などを訪問した。現地の日本研究者ならびにアーキビストとの情報交換なども行った。ドイツでは、農学教育ならびに獣医学教育のカリキュラム、日本関係の文書などをベルリンを中心に国立公文書館、プロイセン関係文書館、大学図書館などで調査を行った。現地のアーキビストとの情報交換を実施した。米国では、農業教育と農学部設置についてマサチューセッツ州立大学アマースト校、ボストン市立図書館で調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 帝国大学農科大学設置は、総理大臣山県有朋の主導の下実施されたもので、薩長の派閥対立という政治的要因が根底にある。

農商務大臣・文部大臣及び帝国大学総長の交代という強引な交代劇により、念願であった農商務省前田派の一扫と東京農林学校の文部省移管が実現したのである。結果的に農科大学の設置は、文部省を頂点とした管理体制の強化に繋がり、農林学校教授・生徒からの異論や同時期に新聞紙上を賑わせた「大学独立論」などを封じ込めるという非常に政治的な意味を有していた。

農科大学が設置された1890年は内閣制度が整備され帝国議会が開催されるなど、法制度も含め日本は国家体制の確立期にあった。農科大学設置もその過程において、農商務省と文部省の大臣レベルで断行されたのである。したがって、山縣総理の意向の下、両大臣が秘密裡に計画、実施したという説明がより真実味を増すのである。

(2) 帝国大学農科大学設置により、帝国大学及び6分科大学が構造的に文部省管轄下に統合されただけでなく、帝国大学令に規定された「国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス」という文部省の論理が貫徹したこととなる。学理を実地に応用することが産業振興に直結するという点で、農科大学を帝国大学に設置した学問的意味は大きい。

「学理」と「応用」のいずれが優位に立つかは、その後も長きに渡り論争となり、戦後の新制大学においてもしばしば議論に上がっている。化学者リービヒは農学が単に経験の学でなくなるためには総合大学内で正當に教育されるべきであるとし、既存の農業アカデミーではなく総合大学における教授の必要性を主張した。帝国大学農科大学の設置は高等教育政策史上、ドイツ総合大学における農学を取り入れた学問体系を意識的に導入したものであり、高等農学教育の発展の大きな一歩となった。

(3) 帝国大学農科大学設置への反対論の根底には、帝国大学教授の多くが旧い学理至上主義から脱却できていないという点がある。

帝国大学教授の多くが欧州の総合大学で学んだ経験があり、実体験として理解した学問観に依拠しているからである。1876年に文部省第2回海外留学生として英国農学校へ化学修行に派遣された杉浦重剛は、純粋理学修行を希望し転学する。当時の杉浦の実体験としての学問観は、幼少時からの儒学を土台とした「学」の連環であり、帝国大学令で規定された「芸」は眼中になかった。しかし、理学を学んだ後の杉浦は、農学は理学の応用であることを説き、「学理」と「応用」の調和を授業法に用いた。

(4) 農商務省管轄下の農学校及び東京農林学校時代に、「学理と応用」を教育理念とする大学化計画が進められていた。大学の水準に引き上げるよう、条件整備も実施された。

1885年に作成された「駒場農学校の目的」には農学・農芸化学・獣医学の3専門学科を設け、「学理」と「実業」を修得させ、農務官僚・農業の先生・獣医・農場管理者などを養成するとある。欧米の農学校教育は、高等の学理中心で実業は僅か、高等の学理と実業が半々、実業中心で平易な学理、の3つに大別できる。との実施はさほど困難ではないが、は目的は完璧だが、結果は期待にそぐわないこともある。駒場農学校が選択したのは必然性があったことだ。高等の学理と平易な実践の両立により、風土に適した農事改良の基盤を構築することこそ、農学校の理念であるとした。この場合の「学理」とは、農学校開校当初は最新の知識の導入を指し、農学校では農業（実践）に対して学理的な成果（化学）を取り入れて分析し、改善策が取られた（農事改良）。

条件整備では、授業料の徴収と通学制の見直し、学力向上のために予備教育機関の創設などが検討されている。

(5) 農学教育が英国流からドイツ流へ転換した理由は、「学理と応用」という教育理念の賜物であり、総合大学でそれを実現したドイツ科学が世界的に高く評価された結果である。

農学は新規の学問分野であったために、最善の農学校制度をどの国から斟酌するか、詳細な検討はなされないままに、駒場農学校の教師は英人で統一された。彼らの任期終了後には、ドイツ人で統一された。ただし、それは先行研究で言われているような国家体制を背景とした政治的理由ではない。英人獣医学教師の後任探しというルーティーンワークの中で、スコットランド人教師の発した最善の獣医学教師はドイツ人、という言葉により大きく転回したのである。スコットランド人がドイツ人を紹介した背景には、国別に捉われない国境を越えた科学者の交流と血の追究姿勢があった。科学は越境するのである。

(6) 科学は越境する。これまでの教育史研究が当該期の制度化・組織化の起源を国別に求め、高等教育において後発の農学教育も組織及び各学問分野の形成を国別に分析・検討してきた。しかし、当該期の欧州をみた場合、自然科学系の学問においては、国別という縦割りの区分で考察することは、ともすれば科学者の本質を無視し、学問研究の横のネットワークの存在を見落とすことにもなりかねない。欧州の学問研究は国家という枠組みが完成する前から存在した欧州の社会共同体の中で育まれた、いわば「学問共同体」である。

ドイツは殖産興業では後発であったが、リ

ービヒの提唱により「学理」と「応用」を併せ持った農学教育を総合大学に導入することとなった。その後の進歩は目覚ましく、実験科学の手法は瞬く間に世界的な広がりを見せたのである。

なお、本研究成果は 2018 年度中に単著として刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

熊澤 恵里子、越境する科学 獣医学教師、英国からドイツへ、日独文化交流史研究、査読有、2017 年版、2017、1 18

熊澤 恵里子、一八九〇年六月帝国大学農科大学の設置 学理と応用、日本教育史学会紀要、査読有、7 巻、2017、1 21

〔学会発表〕(計 2 件)

熊澤 恵里子、越境する科学 獣医学教師 マックブライドからヤンソンへ、日本教育史学会第 620 回例会、2018 年 2 月、於立教大学

熊澤 恵里子、農商務省官立学校の大学化問題と帝国大学、第 39 回大学史研究セミナー、大学史研究会、2016 年 11 月、於明治大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊澤 恵里子 (KUMAZAWA, Eriko)
東京農業大学・その他部局等・教授
研究者番号：90328542

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()